

令和7年度「京都市都市計画審議会 第4回都市計画マスタープラン部会」
会議録

日時：令和7年12月24日（水） 午後6時00分～午後8時00分

場所：京都市役所 分庁舎4階 第4・5会議室

出席者：麻生 美希 同志社女子大学教授
市木 敦之 立命館大学教授
川崎 雅史 京都大学大学院教授
是永 美樹 京都女子大学准教授
関口 春子 京都大学准教授
谷本 圭子 立命館大学教授
檜谷 美恵子 京都府立大学名誉教授
森 知史 京都市住宅供給公社副理事長
山田 忠史 京都大学経営管理大学院教授
以上9名（五十音順、敬称略）

※ 児島 宏尚（京都商工会議所専務理事）
平尾 和洋（立命館大学教授）の2名は所用で欠席

1 開会

——（事務局から委員の出席状況報告）——

2 会議の公開・非公開の決定

・議事について公開に決定

3 議事

（1）エリア別指針について

——（事務局から資料1、2に基づき説明）——

●北部

○川崎部会長

前提として資料2のP.3の5つのエリアを設定しており、駅を拠点としたまちづくりを考えている。これは6年前に策定した「京都市持続可能な都市構築プラン（以下「持続プラン」という。）」が基になっている。その中で挙げていた「学術文化・交流・創造ゾーン（以下「学文ゾーン」という。）」というものがああり、これは5つの基本エリアとは別に、まと

まりのある文化や芸術が進展する京都らしいエリアを作っていくことを掲げていたが、今回記載がない。今後どのようにしていく予定か。

○事務局

平成31年に策定した持続プランには、5つのエリアの考え方と共に学文ゾーンを示し、その場所はあらかじめ定めないものとしていた。学文ゾーンは京都ならではの資源を活かして、新たな魅力や価値の創造を5つのエリアの中で特徴となるまち柄を取り出したうえで、都市計画的なアプローチも含めて考えるというものであった。次期都市計画マスタープラン（以下「都市マス」という。）の策定に当たっては、まち柄をしっかりと見ていくということ、また、地域のまち柄に応じたミクストユースをしていくといった考え方が正に学文ゾーンと同様の考え方である。さらに、都市計画提案制度についても改正し、今までよりも小さい0.1haという規模でも地区計画の策定ができるようになった。これらから、次期都市マスには、ベースとして学文ゾーンの考え方が含まれているという理解である。

○川崎部会長

学文ゾーンがまち柄とミクストユースの考え方に発展したということと理解した。

○関口委員

北部というわけではないが、資料2のP.3に「保全・再生・創造」というキーワードが出ており、今後の文章がこれで整理されていくという印象を受けるが、それ以降あまり「保全・再生・創造」が出てこないで違和感を覚える。

○川崎部会長

「保全・再生・創造」は過去の都市マスからの京都市の都市計画の基本的な方針である。次期都市マスでも考え方は引き継ぐということの良いか。

○事務局

今回の部会は第3、4章を御議論いただいている。「保全・再生・創造」は次期都市マスでも引き継ぐものであり、京都市全体の土地利用の考え方を示す第1章で説明する。

○川崎部会長

隣接している一乗寺と修学院は昔からの集落がある区域である。一乗寺は線的な繁華街がいまだに残っていて若者が集まるエリアもあり、修学院とは少し性格が異なると感じる。一乗寺は若い方々も気楽に色々な活動ができるポテンシャルがあるのでないか。

○森委員

全体を見渡して、まち柄を説明し将来像を描いていくというのが分かりやすく、充実した書き方がされていると感じる。地域中核拠点といった場合に、駅自体が拠点の場合もあるし、拠点的施設はないけれども全体として拠点になっている場合もあると認識しており、そこに人・もの・情報・文化が集まって交流が起こるエリアの中心点であると理解している。

出町柳駅～吉田山周辺は、京都大学があり、駅や商店街、団地再生事業もあり、これから都市機能を誘導していけるエリアではないかを感じる。ただし、1点気になったこととして、「駅前を中心に更なる賑わいの広がり～」と説明文にあるが、「駅前」ではなく「駅を中心に」に替えた方が良いのではないか。現状、駅前には何かあるわけではないため、鴨川を挟んで反対側まで含めて拠点的に発展させていくという意味合いの方が良いと思う。

○川崎部会長

おっしゃるとおりだと思う。大学も京都大学だけでなく同志社大学もあり、また、相国寺などの門前町に商店街の性格もある。水辺の風致と東山の風致に挟まれた中で、映画の発祥地といった文化的要素もあり、ユニークな性格が特化した面白いエリアである。

○是永委員

このエリアに特定するわけではないが、資料2のP.5の3つの類型について、「文化、大学、観光型」とある。京都は大学が非常に多く、新しく入ってくる若い世代も多い。そこに期待したまちづくりや地域の活性化に向けて大学の連携がますます求められる。そのような中、各エリアで「大学」や「若い人」など漠然と書かれているが、採用している基準等はあるのか。

各エリアでまち柄や将来像の説明につながらないような大学まで取り上げるのは難しいかもしれないが、一乗寺の辺りでいくと、京都大学はもちろんだが、ベンチャー企業やものづくりに力を入れている京都工芸繊維大学や京都芸術大学もある。大学を表の看板で掲げるのであれば、様々な大学と連携してまちづくりをしていきたいという姿勢として、幅広く取り入れていくことはいかがか。

○川崎部会長

例えば北山エリアだと京都府立大学など各エリアに散りばめられているとは思いますが、仕分けと分類を確認するということか。

○是永委員

例えば東山エリアの所で、京都女子大学はまちづくりに貢献している先生もいるが、取り上げられておらず寂しいと感じた。スタートはそこ

からだ、広く見ていくと京都工芸繊維大学も含め、京都府立医科大学もベンチャー企業の取組について頑張っているのではないか。そのような状況も考慮し、少し手広く取り上げて良いのでは思うとともに、取り上げればこれを読む大学関係者にも自分の大学が期待されていることが感じられて良いのではないか。

○事務局

特に他意はなかった。各エリアの文脈の中で入れるべき所について入れている。各大学が活動されていることはもちろん承知しているが、漏れなくとは考えていなかった。再度確認していく。

○是永委員

エリアに入っていない大学もあり、漏れなく入れることは難しいと思っている。ただ、一乗寺エリアでいくと京都工芸繊維大学、京都芸術大学、京都府立医科大学も取り上げることでもっと面的にまちづくりができるし、視野が広がるのではないか。

○川崎部会長

一乗寺はアートの記載もあるし、京都芸術大学も入れても良いと思う。他にも関連する大学があればもう少し拾っても良いかもしれない。

○檜谷委員

河原町今出川から丸太町までにかけて、京都大学附属病院や京都府立医科大学附属病院など、医療拠点としてのまち柄があるが、触れられていないことが気になった。広域的な医療拠点で、市民・医療サービスの要でもあるため、触れられても良いと感じた。

○山田委員

全体のことだが、第3章は「工場」という言葉がよく出てくる。用途地域や都市計画の用語としては一般的かもしれないが、世の中のビジネスの局面では「生産拠点」と呼んでいる。「工場」は煙がたくさん出て、重機をたくさん使って、というものをイメージされてしまう。IT関係の半導体を作ったりする企業はファクトリーとか生産ラボと呼んだりしており、それを一般的に「生産拠点」といつている。一般的にイメージされる「工場」を造ったり、都市計画的に「工場」という言葉を使うべきということであれば支障ないが、自由度があるなら「生産拠点」の方が現代の用語の使い方として実態に即している。また、「生産拠点」だけでなく、「生産拠点と物流施設」がより実態に即している。資料2のP.7の「工場」も「生産拠点」の方がイメージに合うのではないかと思う。

質問としては、「工場という言葉が生産拠点に置き換わらないかということ」と、「工場だけでなく物流拠点も明示しておかないかということ」の2点である。今後の都市計画においても明示しておいた方が良いので

はと思っている。

○事務局

場所ごとに御意見を踏まえ検討していく。

●都心部

○麻生委員

「エリア」や「周辺」という名称について統一性はあるのか。例えば、資料2のP.22の核となる駅や軸となる道路があると「周辺」という言葉が使われている。五条坂～東福寺駅周辺エリアのように「周辺」と「エリア」が両方含まれている場所もあり統一したほうが良いように感じる。

また、資料2のP.20の歴史的都心地区周辺も歴史的都心地区で良いのではないか。

○事務局

地域中核拠点駅を示すものは「周辺」としている。歴史的都心地区及び五条坂の件については改めて確認する。

○川崎部会長

京都駅周辺の説明でウォーカブルや公共空間とあるが、現状京都駅前には疲弊した状態で、他の地方都市の駅まちの方が元気があるとも感じられる。インバウンドの影響もある中で都市活力の顔であり、一丁目一番地である駅というものをどう活用していくのか、また、まちづくりをどうしていくのか。人を流すだけでなく、溜めるようなイメージができればよいと思っている。京都駅前には非常に活力のある場所で、駅前がその都市の代表となるため、駅だけでなく周辺も含めてこれから検討する必要がある。神戸や大阪などの駅まちづくりを見ながら検討してほしい。この文面は先日の京都駅前の再生に係る有識者会議の内容も踏まえて記載しているのか。

○事務局

先日の京都駅前の有識者会議の資料から一部抜粋して参考資料2として添付している。参考資料2のP.5～6に将来像として記載している箇所のエッセンスを次期都市マスにも取り入れることを考えている。

○川崎部会長

参考資料2のP.17にある将来イメージのように、一体的にウォーカブルで、また、オフィスが入り生産のための知恵が創出されるような発信拠点にもなり、活性化して人の交流が生まれるような場は理想的であると思う。道路再編や交通の発展にもつながる可能性もある。エグゼクティブ経済や人中心の考え方が出てきていると感じる。

○谷本委員

東山エリアについては、市民からすると観光の集中による住みにくさが顕著で、この土地や河原町はもはや市民生活からかけ離れた土地になりつつある。地域中核拠点エリアの考え方として、観光客との交流などによって京都に暮らす誇りや伝統が受け継がれていくということが理想なのかなと思うと、そういった交流が消えつつある地域がいくつかは見られるのではないかと思っている。

例えば、東山や嵐山のように、観光課題を抱えるエリアについては一定の問題点の指摘があっても良いのではないか。市民にも分かってもらえるような書き方にするべきではないか。

○川崎部会長

確かに観光と市民が断絶されているエリアいくつかあり、これからどうしていくのか検討が必要である。

市として、これから民泊の規制をしていくのか。なかなか総量規制ができない中でも、許可制や宿泊税など、色々な規制の手法があると思うが、各々の担当の部署が検討している段階か。京都のような歴史都市でオーバーツーリズムや民泊のような課題をまとめて抑制をするための政策パッケージとしてどのような方向性があるのか。パッケージで出ると諸都市の先導にもなる。

○事務局

市としても宿泊施設の問題は認識しており、部局を横断して検討しているフェーズに入っている所である。特に懸念すべき状況にある東山などは、居住環境の維持・再生のため、宿泊施設の増加の一途をたどっている状況を都市計画としても考えていかないといけないと感じている。

○川崎部会長

現状、第一種低層住居専用地域及び第二種低層住居専用地域は住宅宿泊事業法の宿泊施設が全面禁止なのか。

○事務局

現状は1月15日～3月16日までの期間は可能。0日規制ができるかは検討中である。宿泊施設の問題については都市計画としても認識しており、東山は「住環境の維持・再生」としており、「調和」という段階ではなくコミュニティを「維持」していくという、一步踏み込んだ書き方としている。

○森委員

四条大宮周辺について、四条大宮を境に西側が少し寂しいということと、西院は拠点性が高いため、そことどうつなげていくかということ等を議論してきた。明確にこれを誘導しようということが示され、四条大宮周辺について、「都心部の活気をつなげる拠点として更なる魅力の向上」

とあるが、どのようにして魅力を高めるかはこれから検討するという
ことで良いか。

○事務局

都市マスでは将来像を示したうえで、手法等はこの将来像を基にこれ
から検討していく。

●東部

○川崎部会長

特急はるかの延伸が、山科に宿泊施設が増えたりすることにつながっ
ていくのか。

○事務局

山科駅前は今和5年の都市計画見直しのエリアからは外れていた。は
るかが延伸することで京都の東の玄関口としての利用が進み、山科から
地下鉄に乗ってどこかへ向かうなど新しいルートが生まれる。現状、駅
前にホテルなどは多くないが、次期都市マスでしっかり位置付けておく
ことで、今後の発展につなげていきたい。

○是永委員

特定のエリアをイメージしたものではないが、地上の鉄道駅は駅前広
場等の駅の存在があるため拠点を作りやすいが、地下鉄駅は駅の顔を作
りにくい。地下鉄駅は三条駅のようにわざわざ拠点施設を作らないとい
けないか。方針を教えてください。

○川崎部会長

公共空間の広がり出てくれば良いと思う。地域中核拠点は表玄関では
なく、サブ玄関のようなイメージだが、どのような方針なのか。

○事務局

地下鉄の駅だから地上に何かを作るというよりは、乗降客があるとい
うことがまちや人の動きにつながるため、人流を活かして賑わいや交流
を作っていきたいという方針である。特定の再開発事業が計画されてい
るということではない。

●南部

○川崎部会長

久我の辺りの準工業地域をどう考えていくか。サウスベクトルとの連
携で大きな産業の軸を南部に作っていきたいとしており、ここを発展さ
せていきたいということだったが、準工業地域が悩ましい。準工業地域
には、住居が多いエリアもあれば工場が多いエリアもある。可能であら
ば実態に応じて迅速に用途地域を変えていく必要がある。そのような状

況もある中で、南部が製造業や生産拠点としての基盤がしっかりしていないと背骨がしっかりしない印象を受ける。

○谷本委員

資料2のP.33の向島ニュータウンについて、「多文化」が強調されているが、文化という言葉が使われているのは歴史的なエリアで使われる印象だが、ここで「多文化」を使う意味は何か。

○事務局

向島ニュータウンまちづくりビジョンでも示されているが、色々な国籍の方が住んでおられるエリアで、そのような背景を踏まえて書いている。すなわち、「多様性」又は「多文化共生」と捉えていただいても良い。

ビジョンの考え方もしっかりと引き継ぎ、次期都市マスに位置付けていきたい。

○関口委員

意味は理解したが、特に何かする予定がないのであれば、向島ニュータウンを取り出す必要があるのか。今後何かをしたいということがあるのか。

○事務局

ビジョンを踏まえて地域全体の活性化を目標に、地元の方が活動をされている。地区計画も策定しており、多文化に関して直接的につながる施設を誘導していくわけではないが、これまでのまちづくりを踏まえ記載したものである。

向島ニュータウンには、京都市住宅供給公社が設置した留学生の受入先もある。市営住宅の中でも、特に向島には色々な国籍の方が住んでいる。そのような背景もありビジョンでは、多文化・多世代共生のまちづくりを進めるとしており、次期都市マスでもそれを受けて記載している。今直ちに何かをするわけではないが、向島にしても洛西にしてもニュータウンは町開きから50年経過しており、近い将来に何らかの形で再編等を考えることはあるかもしれない。ニュータウンとして都市計画的な観点からもさらに手を加えていくということは十分見込まれると考える。

○川崎部会長

日本語も英語も得意ではない留学生が、住んでおられる方との交流で助けられたという記憶がある。留学生を受け入れる体制がまだまとまっていない部分もあるため、これをまちづくりの一つのテーマとしてやっていくのは面白いのではないかと考える。

●西部

○森委員

資料2のP.39の嵐電嵐山線・有栖川周辺エリアについて、エリア名称に対して広範囲を示しているように思え違和感を覚える。これだけのエリアの中に5万人以上の方が住んでおられる。資料2のP.3に地域中核拠点エリアの決め方が書かれており、駅から半径500mの範囲の商業・業務機能の延べ床面積が概ね10万㎡以上、駅の乗降客数が概ね300万人/年といった数値を基に定量的にエリア選出している。嵐電は輸送力も小さいし、乗降客数も多くはないが、太秦・嵯峨野の拠点としては、太秦広隆寺駅や帷子ノ辻駅周辺があげられる。東映撮影所・松竹撮影所があり、また、大映通り商店街などもある。元々の右京の拠点的なものがありながら、エリア全体の将来像として「四条通周辺や、都心部で働く若年・子育て世帯などの住まいのニーズを受け取めることができるまち」とするのは、住んでおられる方には理解されにくいのではないか。エリア名称は右京区役所と協議してはどうか。また、全体として帷子ノ辻周辺のような拠点性のある所について、拠点性の維持などについて書くべきではないか。さらに、個人的には三条通、四条通、丸太町通は生活利便性を誘導するイメージもある。要は、これだけの広いエリアで単純に「住まいのニーズを受け止める」とするのはいかなるものかと感じたもの。

○事務局

太秦天神川西側の旧市街地辺りなど、拠点という切り口で取り上げる所については、太秦天神川駅周辺で拾い上げたい。拠点で括れない太秦のスプロールの問題を別で取り上げたかったため、このエリアについてはあえて拠点に縛られない表現としていた。やろうとしていることは、狭小な敷地に対しての選択肢を増やすということである。ここで拠点性について書くとやりたいことがぼやけてしまうので、やろうとしていることと表現がぶれないようにもっとスッキリと書いたほうが良いと感じた。

○谷本委員

森委員と同様の意見。嵐電嵐山線・有栖川周辺エリアの南西の一部は嵯峨嵐山・嵐山駅周辺にしても良いと感じた。嵐電嵐山線・有栖川周辺という名称にも違和感を覚えており、嵯峨・太秦くらいの方が地元の方にも納得されるのではないか。

○川崎部会長

京都先端科学大学やサンサ右京の辺りのエリアの期待値が大きいのではないか。あの辺りの葛野大路通には製造工場がいくつか並んでおり、それらをまとめていくのが良いのではと感じる。次回までに少し整理さ

れてはどうか。

洛西地域では自動運転の実験等も予定されており、先端技術の発展に取り組む桂イノベーションパークも巻き込んで、周辺のまちも発展していくと良い。

○森委員

桂イノベーションパークは5年で出ていかなければならず、次に入る所がなくて悩ましいとのことで、桂イノベーションパーク周辺～桂駅エリアで示すような対策を講じようとしていると認識する。そうであるならば、現状案では桂駅に向けての流れになっているが、洛西ニュータウン全体を含めるような形にした方が良いのではないかと。ニュータウン全体をどうしていくかという課題に向け、何か手を打っていかねばならない中で、今後一定のまとまった土地が出てくる可能性がある。スタートアップ企業は点在しているとあまり意味がなく、京都リサーチパークのようにある程度まとまっていることで情報交換ができたり、新たなものが生まれたりという意味をなしてくると認識している。働く場の創出として、洛西ニュータウンでも受け止められるように次期都市マスにも記載すべきではないか。桂イノベーションパーク周辺～桂駅エリアでもニュータウンの要素を記載し、洛西バスターミナル周辺の記載もそのまま残しておけば良いと思う。

○山田委員

資料2の P.38 のウェルビーイングなまちについて、ここだけで良いのかと感じた。最近では少子高齢化を迎え、健康まちづくりや病院を中心としたまちづくりを都市計画としてよく見るが、次期都市マスでは全体的にクローズアップされていないと思っていた。健康まちづくりの考え方は、これからの時代に当たり前のことなので、どの地区も病院などを大切にしながらまちづくりをしていくため、特段フォーカスをしていないと認識している。また、病院は民間企業であり、病院の統廃合も進む中で、特定の病院を想定したまちづくりは中長期的にもリスクがあるとも感じる。西京極周辺、五条通周辺については、京都市立病院や京都リサーチパークもあり、特に健康に関する要素が集積したウェルビーイングなまちであると認識しているが、だからこそ、もっと前段に全体をまとめたような箇所でもウェルビーイングなまちを目指すということ記載してはどうか。

○事務局

第1、2章に全体に掛かるような形で記載することを検討する。

○谷本委員

資料2の P.40 の市街地西部の工業地域の説明にある「環境負荷にも

配慮した」は、ウェルビーイングと同様に総則的に重要なポイントではないか。

また、資料2のP.39、4のリード文にある「渡月橋の北側においては来訪者の集中」としてあるが、先ほどの東山に関する記述である資料2のP.20、2のリード文では「周辺の行き過ぎた賑わい」としている。どちらかといえば、「来訪者の集中」など同様の言葉を使う方が問題点としても認識しやすく良いと感じる。

○事務局

表現の統一について検討する。

○是永委員

資料2のP.41の桂駅周辺、桂川・洛西口駅周辺エリアについて、居住環境を創出していかなければならない一方で、桂には桂離宮や、桂川には祇園祭の駒形稚児を出す上久世集落などがある。現状、その他のエリアではそれなりに歴史について触れられているが、桂では触れられていない。現状の記載だと、歴史の要素は消えていて、うがった見方をすれば、大規模な居住者エリアを造ったり、マンションを誘導することと読み取れてしまう。何か意図があるのか。

○川崎部会長

人口減少社会の中で、人口が増えているエリアとして認識しているのではないか。

○是永委員

このエリアだけ歴史に触れられていないことが気になる。これまで何度か指摘したが反映されていない。この地域に新しく来られる方にも、京都の歴史を感じられるエリアだという方がよいのではないか。京都はどこに来て歴史を感じられるということが京都の良い所という視点もあるのではないか。

○事務局

将来像に紐付くかは分からないが、まち柄を紹介するという意味で、歴史もまちの魅力の一つでもあるため、表現を改めて検討する。

(2) 実現方策について

———（事務局から資料3に基づき説明）———

○檜谷委員

京都市ではイエローゾーンとされている範囲がそれほど広くないという印象を受けた。広い自治体では、居住誘導区域からこれを全て除外するとなれば影響が大きく、難しいだろうが、このくらいなのであれば、意識啓発を行うためにも対象のエリアを居住誘導区域から除いても良

いのではないか。

資料3のP.3の魅力ある公共空間の創出について、「サードプレイス」という言葉が使われているが、一般市民に分かりづらくないか。「第3の居場所」でも伝わるのではないか。図書館は必ずしも第3の居場所として使われるだけではないと思うので、「サードプレイスとなる図書館」は形容詞の掛かり方として特化しすぎではないか。

○川崎部会長

イエローゾーンの在り方として、過去に災害があったとして、その後災害が発生しないよう対策を講じたとしても、一度レッドゾーンやイエローゾーンを指定してしまつとなかなか塗り替えることができない。安全になっているにもかかわらず、道路等の補助率が低くなり、そこで住んでいる方が損をするのではないだろうか。個人的には、現状では居住誘導区域を外さない方が良いのではとと思っている。

子どもが騒いでも良い図書館や、自宅以外の落ち着ける場など、公共施設の概念が変わってきている中で、サードプレイスの概念も先取りで入れておくことも京都らしくて面白いのではないかと感じる。

○事務局

サードプレイスの考え方は色々な所で言っているが、表現の仕方については検討する。サードプレイス＝図書館ではないという御意見についても検討したい。

イエローゾーンについては、市としても悩んでいる。住んではならないというわけではないが、行政が旗を振って誘導するかどうかが問題であると認識している。レッドゾーンは砂防ダム等の対策を講じれば消える可能性があるが、イエローゾーンは規定の斜面地勾配等があれば機械的に指定されるため、レッドゾーンが消えているにもかかわらずイエローゾーンは残るといった仕組み的な部分での懸念もある。我々としても、みなさまの御意見を伺って検討したいと思っていた。

居住誘導区域から外れることで、危険であることを注意喚起する意味もあるが、対策を講じてレッドゾーンが消えたとしても、イエローゾーンは消えないという問題もあると認識している。

○川崎部会長

国が実態に応じてより敏感に対応してくれれば良いのだが。

○関口委員

土砂災害について専門ではないが、イエローゾーンで被害が生じているのは確かで、指定の意味はあると思う。ただ、色々な状況のイエローゾーンがあるとも認識している。居住誘導区域の設定のままではあるが、そのエリアで子育て関係の補助を出さないなど、中間的な施策をしてい

る行政もあるようなので、そういった手法も考えてはどうか。

○檜谷委員

防災が専門ではなく、イエローゾーン指定をめぐる状況について、十分に理解して発言したものではないが、イエローゾーンに建っている公営住宅を順次用途廃止する方針を示すなど、対応している自治体もあることから、居住誘導区域から外せば、リスクがあることを一般の方に理解してもらいやすくなるのではないかと考えた。

○事務局

イエローゾーンについて、居住を誘導する区域として堂々と次期都市マスに記載するかどうかを悩んでおり、絶対に安全といえないものは外した方が良いのではと思っている。ただし、外した時の影響を考えると、例えば、市街化区域から外すとなると私権の制限が掛かることになるが、居住誘導区域から外したとしても、住むことも建て替えることもできるため、あまり大きな影響はない。意識啓発の意味があることに重要性を感じている。

市街地西部の工業地域は、一定の基準を満たした住宅についても高さ31mまで可能としたエリアだが、工業地域であるため自動的に居住誘導区域からは外れている。同様にイエローゾーンは「住んでも構わないが、十分気を付けて住んでください」というメッセージにもできるのではと思っている。委員の方々の御意見を踏まえ検討していきたい。

○市木委員

第2章のテーマ別4項目のうち一つは「安全・安心」で、その他3項目については第3、4章でうまく取り込まれているが、「安心・安全」や防災についてどうしていくかがあまり書かれていないと感じた。テーマ別で書かれている所がどのように第3、4章で拾われているかが分からない。

○川崎部会長

第3章のエリア別指針から段々と各論的になってきているが、背景として「安心・安全」があるということを意識するべきで、現状案では「安全・安心」の要素が足りないとの御意見かと思う。

○事務局

次回、改めて第1、2章の内容を御確認いただく機会があるため、それまでに委員からの御意見を踏まえて、もう少し肉付けを検討していく。

「サードプレイス」という表現は「新京都戦略」でも記載しているが、京都市の他の計画も参考に整理しておく。

○川崎部会長

富山県のまちづくりシンポジウムの中で、サードプレイスという概念

でカフェを増やしていきたいといった発表があった。他府県の状況も確認し、取り入れられる部分があれば検討してはどうか。

(3) 今後のスケジュールについて

—— (事務局から資料4に基づき説明) ——

4 閉会

(了)